

進路希望の形成と変化．職業キャリア意識と家族． 進路指導と進路選択の活動

吉本，圭一
雇用職業総合研究所

<https://hdl.handle.net/2324/18646>

出版情報：高校生の職業希望の形成と変容，pp.1-6，1989-12-01．雇用職業総合研究所
バージョン：
権利関係：



第2章 進路希望の形成と変化

第1節 進路希望の形成と変化のモデル

高校卒業時の進学・就職という選択は、わが国の青年期の進路選択におけるもっとも大きな分岐のひとつである。OECD教育調査団がこの時期を「社会的出生」と名づけたように、将来のキャリアはその後大きく異なることになる。このため、この段階での進学・就職をめぐるアスピレーションや現実の選択とについて数多くの研究がなされてきた。そのうちのひとつに「トラッキング」モデルでこうした現実を説明するものがある。これは、「大学入試」一時点での決定的な分化・振り分けよりも複数時点での連続的な分化・振り分けの過程を重視するモデルである。ここで「トラッキング」¹⁾ というのは、複数段階に渡る選抜の過程において、前段階での選択・選抜の結果生じた現状に応じて、それ以後の機会・可能性が一定範囲に制約されることを示している。つまり、それぞれの段階で枝分かれが進み、前の段階での失敗を後で取り戻す再挑戦の機会が少なくなるということである。

そしてこうした「トラッキング」が成立するプロセスを説明するものとして、「分離化」と「分極化」の対応図式²⁾がある。つまり、制度・組織的に「分離」された処遇を受けることで、それに対応した意識の「分極化」、枝分かれがおきるというものである。たとえば、高校在学中の進路意識形成プロセスにおいて、進学への希望・アスピレーションをウォーミングアップ（加熱）する過程と、クーリングアウト・ダウン（冷却）する過程があり、こうした意識変容は、普通科・職業科、進学校・就職校など入学段階での高校の条件に左右され、初期の差異が卒業時にはより拡大すると仮定されていた。具体的には、個々人の進路希望が高校入学以降変化するばあいにも、普通科や特に進学校では進学希望のウォーミングアップが、逆に職業科ではクーリングアウトが進むというのである。また学校内での成績による意識の「分離化」過程も注目されており、成績に応じた進路希望の分化が進むと仮定されていた。

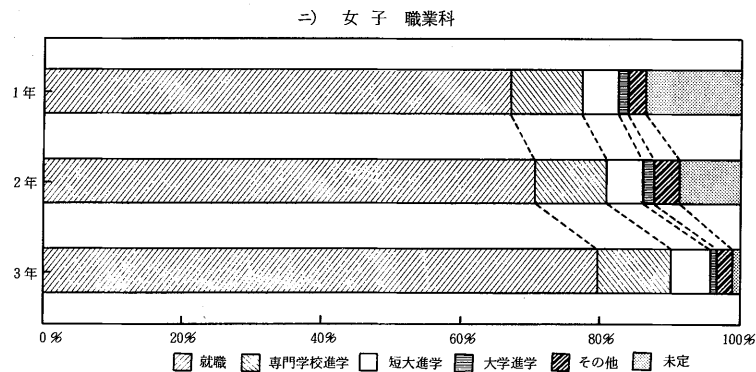
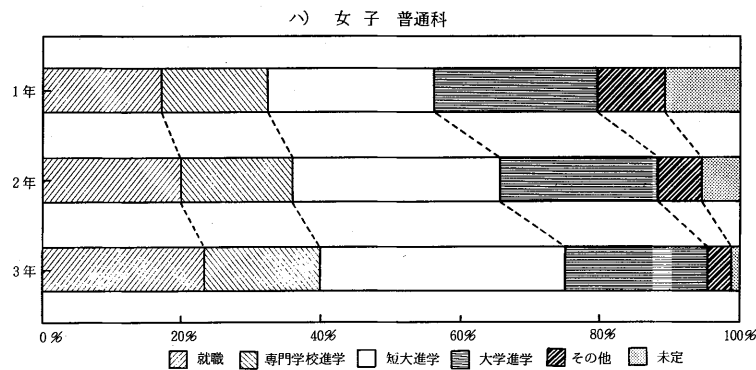
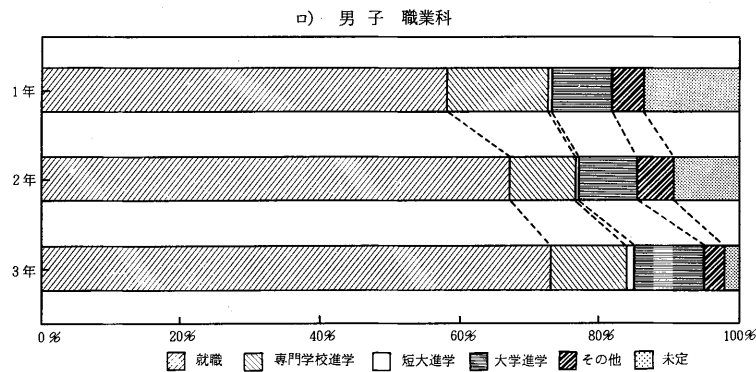
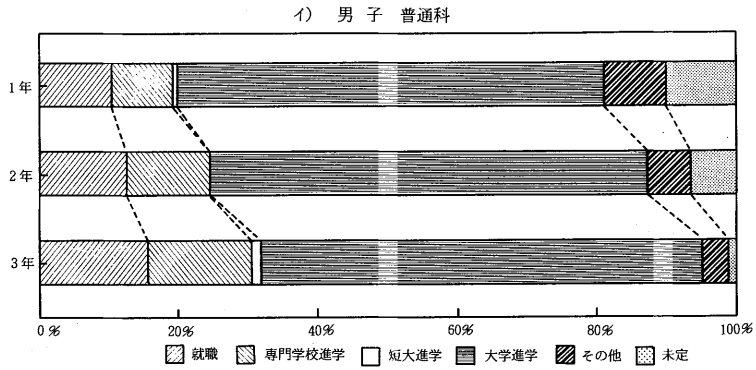
しかし、仮にこうした方向がさまざまにあるとしても、進路希望の分化の程度はいかほどのものであるのか、その肝心の点が事実として正当に把握されてきたとはいいがたい。ひとつには、これまでの研究が、変化するはずの進路意識を、もっぱら回答者に回顧させる質問によって把握していたという問題がある。いったい我々が調査で把握する進路希望というものはどのようなものなのか、またどのような方向で形成されていくのか。各学年での意識を調査した結果を分析して、これまでの方法との対比することも有意義なものとなるだろう。

第2節 進路希望の推移と希望変更(回顧)

1) 進路希望の推移

1年から3年までの進路希望の推移をみると、次第に進路希望が決まっていき、全体として各学年でその進路先の分布に大きな変化はない。

図 2 - 1 性・学科別の進路希望の推移



つまり、図2-1のように1年生の時点では進路希望が未決定の者が12.2%いたけれども、学年進行とともに進路希望未決定の比率は次第に減少し、3年生の1学期の段階では、わずかに1.4%までになっている。

これに対して就職希望者は、41.0%から51.2%まで増加している。進学希望者の方は、女子の短大希望（14.4→20.3%）が増加しているほかは、大学・専修学校などの希望に大きな変化はみられない。

2) 進路希望の変更（三年時からの回顧）

高校生全体の進路希望の比率には各学年で大枠として変化はないものの、個人的にはさまざまな希望の変化がある。進学か就職かの選択の変化だけでなく、同じく大学進学希望の中での学校・学科・地域の希望の変化とか、就職希望の中での産業・職業の希望の変化などさまざまにあるだろう。そこで、3年生に対して、自分で自覚している進路希望の変化の有無を聞いた。その結果は表2-1のとおり、1年生のころから希望が変わったと回答しているのは37.6%であり、残り60.2%までが変化がなかったと回答している。特に、男子では変化したという生徒が33.4%にとどまっている。

表2-1 1年時からの進路希望の変化

		合 計	進路希望 変わらず	進路希望 変わった	小 計	進学 →進学	進学 →就職	進学 →就進	就職 →進学	就職 →就職	就職 →就進	未定 →決定	その他	不 明
男	普通科	100.0	65.8	34.2	100.0	58.0	12.3	0.0	11.6	0.0	1.4	7.2	0.7	8.7
	職業科	100.0	65.9	34.1	100.0	5.0	20.7	1.4	22.5	1.4	26.6	12.6	2.3	7.7
	小 計	100.0	65.9	34.1	100.0	25.3	17.5	0.8	18.3	0.8	16.9	10.6	1.7	8.1
女	普通科	100.0	54.0	46.0	100.0	48.9	17.0	2.6	9.8	0.9	3.8	12.8	1.3	3.0
	職業科	100.0	60.3	39.7	100.0	7.0	28.9	0.0	15.9	1.0	29.9	10.4	2.0	5.0
	小 計	100.0	57.1	42.9	100.0	29.6	22.5	1.4	12.6	0.9	15.8	11.7	1.6	3.9
男 女 計		100.0	61.6	38.4	100.0	27.6	20.2	1.1	15.2	0.9	16.3	11.2	1.6	5.8

注) 進学→進学などは、地域・学校・学部などの変化
就進=就職進学

また1年からの希望が変化したと回答した生徒たちについて、その変化のパターンを自由回答からまとめてみると、大学・短大・専修学校間の変化も含めた進学希望の中での変化（27.6%）がもっとも多く、以下は、進学から就職への変化、就職の中での変化、就職から進学への変化といった順になっている。進学の中での変化では、大学希望の中での変化が10.2%を占めているが、ここにはさらに学部・学科といった専攻を変化させたケースと国私立希望や個別学校希望を変化させたケースがほぼ同じくらいにある。

3) 希望変化の理由

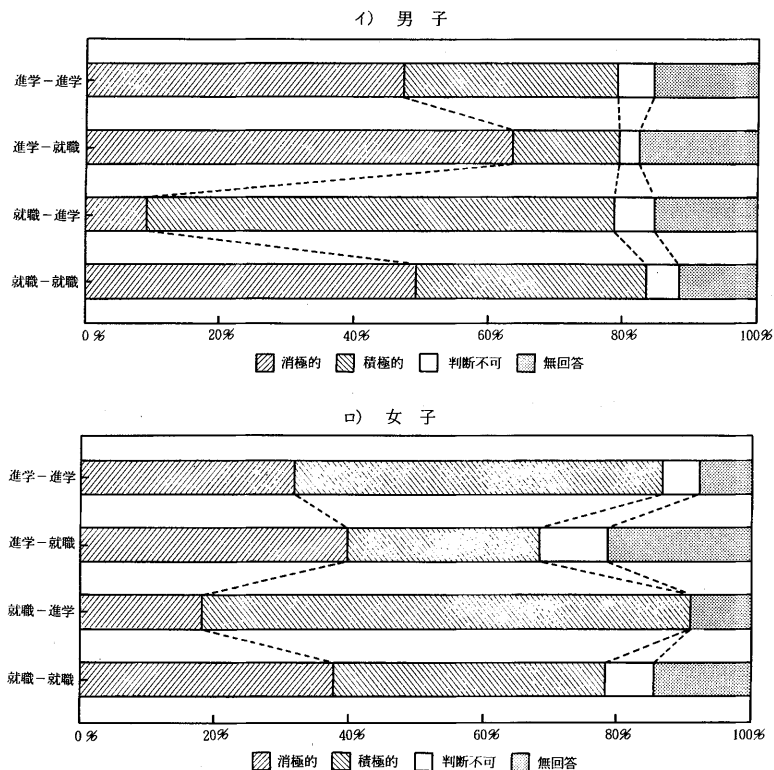
進路希望を変えた理由について自由回答を整理してみると、表2-2のように自分の興味や能力に関するものが多くなっている。また、変更理由には、希望を変えるときに前の希望を取り下げる理由となっているもの（学力が足りないとか興味が薄れたなど）と、逆にあらたに現在の希望を選

表 2-2 進路変更の理由

	男 女 計	男 子	女 子
合 計	100.0	100.0	100.0
職業や学問への興味	7.5	7.5	7.6
将来の見通し	6.9	10.6	3.9
自分の適性	6.9	7.2	6.7
学力面のこと	6.0	9.4	3.2
就職の可能性	3.0	4.4	1.8
家族や先生の意見	2.5	1.7	3.2
経済的なこと	2.0	1.9	2.1
自力で収入の魅力	0.6	0.6	0.7
社会に出ることの不安	0.4	0.0	0.7
学生生活への期待	0.4	0.3	0.5
無 回 答	63.7	56.4	69.7

んだ理由となっているもの（おもしろそうだからなど）とがあるが、前者を消極的理由、後者を積極的理由として分けてみると、女子では消極的な理由よりも積極的な理由が上回り、男子ではほぼ拮抗している。これを、先にみた進路希望変化の4つのパターン別にみると、図2-2のように就職→進学という変更のばあい男女とも7割前後が積極的な理由をあげている。これに対して、進学から就職への変更の場合とくに消極的な理由が多く、男子では6割を越し、女子でも4割近くまで

図 2-2 進路希望の変更とその理由



になっている。就職希望内での職種などの変更や進学希望内での変更の場合にも、男子を中心に消極的な理由が多くなっている。

以上、三年生時点での回顧データにもとづく進路希望の変化だけを見ると、前節で紹介した「トラッキング」モデルに一見符合するかに見える。さまざまなレベルを含めて高校在学中の進路希望の変化は少く、進学から就職への変化は本人にとって「消極的」な選択、逆の就職から進学は「積極的」な選択と意識されている。

しかし、枝分かれで、再挑戦の少ない変化が現実を適切に写しだしたものなのだろうか。回顧させることで、調査する側が調査者に無理強いして、過去の「ストーリー」を「筋の通った」もの一しばしば研究者が用意している一として作らせ語らせてはいないだろうか。われわれは、過去の時点での調査結果を持っており、この点を次節で検討することができよう。

第3節 進路希望の形成・変化パターンの分析

1) 三調査時点比較による進路希望の一貫性

1, 2, 3年の三回の調査を組み合わせた進路希望のパターンをみると、表2-3のようにまとめられる。「大学」「短大」「専門学校」「就職」の4つの進路希望で、1年, 2年, 3年いずれも同じ希望を答えた者を「〇〇一貫」として別掲してみると、そうした一貫した希望を持っていた者は必ずしも多くない。合計して男女ともほぼ半数である。中では、就職希望と回答した「就職希望一貫」の比率が、男女とも3割あり、「大学進学一貫」は男子で2割ある。

ともかく、それぞれの高校入学によって機械的に進路希望が一定方向に水路づけられ、固まっていくというのではなく、比較的多くの高校生にとって、在学中に進路希望が変化し、あるいは意識が揺らいでいるといえよう。

表2-3 性・学科別の進路希望（3年時）とその一貫性

		合計	進学 希望 一貫	就職	うち 就職 一貫	専門 学校 進学	うち 専門 一貫	短大 進学	うち 短大 一貫	大学 進学	うち 大学 一貫	その他	未定	うち 未定 一貫
計		100.0	49.0	51.2	30.5	13.1	2.5	10.5	3.1	20.7	12.9	3.1	1.4	0.2
男子	普通科	100.0	54.4	15.8	5.3	14.8	1.9	1.2	0.0	63.3	47.2	3.9	1.0	0.0
	職業科	100.0	49.4	72.9	44.9	11.0	1.8	0.9	0.0	10.1	2.7	2.9	2.1	0.5
	小計	100.0	51.4	51.0	29.7	12.5	1.9	1.0	0.0	30.5	19.8	3.3	1.7	0.3
女子	普通科	100.0	38.3	23.3	10.5	16.7	4.6	35.0	11.7	20.4	11.5	3.5	1.2	0.0
	職業科	100.0	54.7	79.6	52.2	10.6	1.5	5.6	0.8	1.0	0.2	2.3	1.0	0.2
	小計	100.0	46.5	51.4	31.3	13.7	3.1	20.3	6.2	10.7	5.9	2.9	1.1	0.1

注) 一貫 = 1, 2, 3年生の各調査時点で同じ希望を持つもの

2) 追跡データと回顧データのずれ

この希望の一貫性についての結果は、前節での自覚している希望変化を回顧データから読みとれる傾向とずれがある。回顧データでは、進路希望の変化をはるかに広範囲（地域とか学校・学部、産業や職業の変化まで）に聞いているにもかかわらず、追跡データよりも希望変化が小さい。追跡データのばあい、回顧データに対応させて一年時と三年時との変化だけに絞っても、大学・短大・専門・就職別の進路希望が両時点でも一致している者は57.1%にすぎない。逆に、残り42.9%が1年と3年との間で希望変化したり未定から希望を決めている。他方、本人の回顧によるデータのばあい、進路をめぐる多様な希望変化は37.6%にとどまり、追跡データ分析による希望変化を下回っている。

つまり、2つの方法で把握する進路希望の一貫性や変化に食い違いがみられる。これは、ひとつには過去の記憶があいまいであったり、過去の希望は現在の希望によって正当化されるという回顧型の質問の不正確さのためである。それ故、アスピレーション形成の問題では、特に本報告書で実施しているようなパネル調査の方法が求められる。しかし、こうしたパネル調査によって問題がただちに解決するわけでもない。進路希望自体が高校1、2年段階で流動的でありまた曖昧なものであるとすると、そうした進路希望をあえて調査データとして把握するとき幾分か本人のリアリティーとのずれが生じることはさげがたく、基本的には解釈の段階で注意すべき点であろう。

3) 進路希望の形成パターン

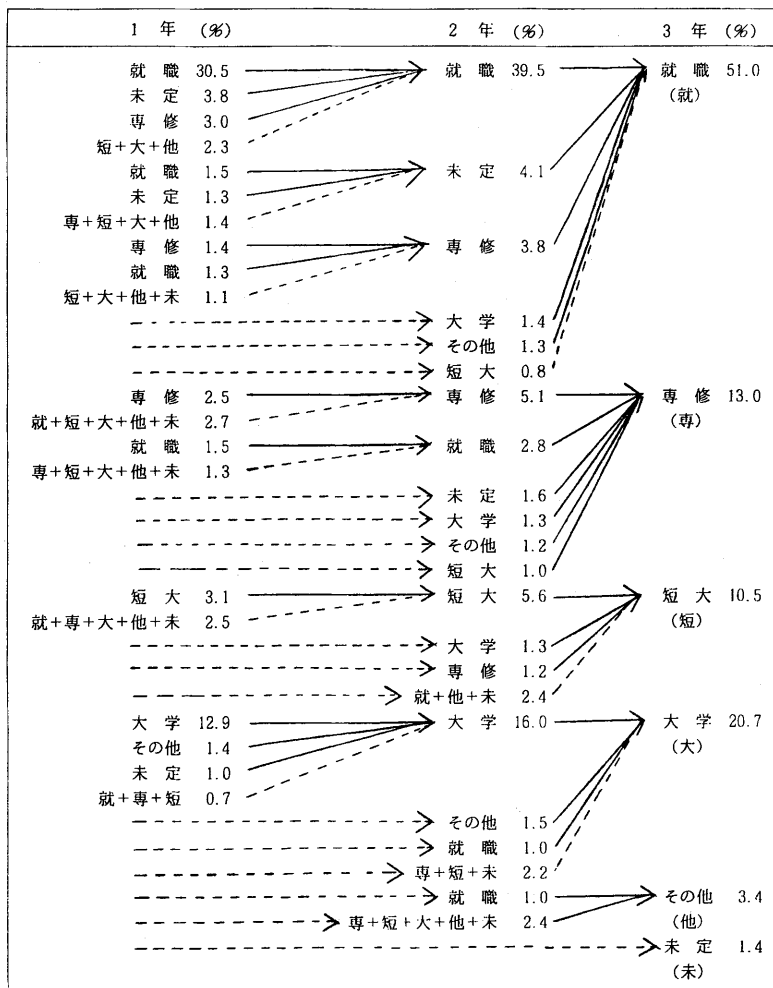
三時点での調査結果を3年生の希望のほうから遡ってみると、図2-3のようにさまざまなパターンが生じている。まず大学希望者20.7%のうちでは1年から同じ希望で一貫している者が12.9%、また就職希望者51.0%のうちでは1年から一貫している者が30.5%である。3年でこうした進路を希望する者のばあい、それぞれ約6割が高校入学頃から同じ希望を継続していたことがわかる。

こうした一貫性の高い大学・就職とくらべて、専修学校希望者は希望の一貫性が低い。3年時点で専修学校希望者は13.0%であるが、彼らの1、2年時の希望をふりかえってみると、専修学校以外の希望を持っていた生徒のほうが多数を占めている。2年生で同じく専修学校希望だった者は5.1%に減少し、当時は就職希望だった者も比較的多い。1年生までさかのぼると、入学の頃から一貫して専修学校希望の者は2.5%にすぎず、3年時の希望者中の比率でも2割以下と少なくなっている。そのほかは就職希望者と大学・短大進学希望者が同程度いる。つまり、専修学校希望は卒業近くまで固まっていない。他方、1、2年時の専修学校希望者では、3年になって就職希望へと変更する生徒も多く、また大学・短大希望への変更も見られる。つまり、専修学校は他の進路希望から流れ込むだけの一方的な「受け皿」ではなく、むしろ専門学校希望に特徴的なことは、他の進路希望との往来、つまり流動性が大いなことである。

また短大についても、3年時の希望者中の一貫率は3割と低く、大学希望から変更する者も2割近くいる。

逆に1年時に進路希望が未決定であった生徒についてまとめてみると、3年生になったときで53.7%が就職へ、16.7%が専門学校へと希望を決めており、これは全体の3年時の希望の比率よりも高

図 2 - 3 高校生の進路希望の形成パターン(男女計)



注) 比率1.0%未満の希望は、合算して表示している。

() 内は、6つの進路選択肢の略字。

い。逆に、大学進学希望になっているのは14.0%であり、全体の20.0%よりも低い比率である。

以上の結果をまとめてみると、進路希望のパターンは、「大学」「短大」「専門学校」「就職」の希望は、在学中に意識が変化したり、あるいは完全に確定せず揺れ動いている。大学については、その進学希望は相対的に早く形成され変化が少ない。そして、低学年での希望未定や他の希望からは後で大学進学希望に移りにくい。これに対して専修学校希望は3年間にわたって流動的であり、就職希望や大学短大希望との相互の流入・流出が大きい。また、短大希望も大学希望から流入してくるばあいが見られる。

就職希望についても、大学希望者と同じく多くは早期に決めている。もちろん、進路希望未定や専門学校からの2、3年になって就職希望へ移ってくる者も一定の比率で出てくる。

4) 専修学校希望と職業への志向・実学志向

ここで、少し専修学校希望の特徴をまとめておきたい。専修学校への希望は、3年間の調査を通して流動的であり、状況に応じて就職希望や大学短大希望へと変わることも多い。しかしこのことは、必ずしも彼らの進路への意識が「ふらふら」していることを意味していない。

むしろ、独特の価値観から積極的に専修学校への進学を考え始めている、という可能性も見ることができる。これを端的に示すのが、職業をめぐる意識である。「つきたい職業の希望」（次章で詳細に検討）について、1年生の頃から決めている生徒は専修学校希望者のばあい39.5%あり、全体の32.7%よりも多くなっている。逆に、一貫して希望職業が未定の者は他の進路希望の者より少なくなっている。また、職業キャリアについての希望も明瞭であり、特に「ひとつの仕事の専門家」と「多くの部下をもつ管理職」のどちらを選ぶかという質問に対しては、専門家志向が68.8%と高く、全体の45.4%を大幅に上回り、判断保留などは少なくなっている。

つまり、専修学校希望者は、大学・専修学校・就職という選択での希望は流動的であるが、他方、職業生活への展望は早くから明確であるばあいも多い。つまり、彼らの中に、専門職としての職業生活を送るという価値観が先にあり、次に高卒後は就職か、大学・短大か、専門学校かと進路を選択する者たちがいることを示唆している。専修学校をめぐる希望は、いわゆる「偏差値」による大学選択などの次元とは別のところで生じており、学校は就職環境の厳しさや大学・短大の狭き門に対する単なる「受け皿」という位置づけを越えているのではないだろうか。

結局、専修学校への進学希望者は多くのパターンがある。一面では、大学・短大や就職など他の進路環境の厳しさゆえに、専修学校は今日その代替的な進路を提供している。それと同時に、職業生活への志向のもとで、つまり実学重視で学校を選ぶ者たちを生み出しているのも、専修学校なのである。

第4節 学科・学業成績と進路希望

1) 学科と進路希望

前節で進路希望の形成・変化は、制度・組織の「分離化」によって意識が「分極化」という変化なのかどうか、ここでは学科や学業成績との関連で検討を続けてみよう。同じく表2-3で学科別に進路希望の形成のプロセスをみると、どの学年でも普通科で進学希望が多く、商業科、工業科、家庭科の職業科では就職希望が多い。さらに、それぞれの希望がどれほど一貫しているかという点に注目してみると、普通科では大学進学希望者が男子では63%あり、この大半が3年間大学進学の希望で一貫している。また女子でも、大学希望2割、短大希望3割のうちほぼ半数が3年間一貫した希望の生徒である。

これに対して、職業科では男子の大学希望、女子の短大希望などわずかにあるものの、その希望が3年間一致している者は少ない。また、専修学校希望者をみると、普通科でも職業科でも希望が一貫していた生徒は少ない。

他方、就職希望をみると、希望者の多い職業科では男女とも一貫している者が多いのに対して、希望者の少ない普通科ではそのなかでも一貫した希望は少なくなっている。

つまり、普通科では希望の多い大学進学・短大進学で一貫した希望が多く、職業科では希望の多い就職について一貫した希望が多い。逆に、普通科の就職希望者と職業科の進学希望者など、それぞれの学科の少数派の進路では、一貫した希望を示しているケースが少なくなっている。普通科では、もともと1年時点でも進学希望の生徒が多く、その後進路未定から専修学校進学と就職希望が増える。職業科ではもともと就職希望の生徒が多く、その後も就職希望が増え、専修学校希望が減少する。

こうして、普通科の進学希望率（大学+短大+専修学校）は66.0%から75.3%へと上昇し、職業科では就職希望が65.3%から75.7%へと上昇している。普通科と職業科との間で進路希望がより大きく分かれていく「分極化」が進行している。ただし、より重要な点として、各学校の就職希望率との関連は明らかではなく、必ずしもすべて進学の方が就職の方へ分れていくとはいえない。

2) 進路希望の変化と学業成績

次に進路希望と学業成績との関連をみよう。第2節の進路希望変更の理由として、就職への変更では「学力が足りない」など消極的な理由が多く回答にあげられていた。学業成績が、学校内の進路意識形成・分化の重要な要因のひとつであることは疑いえない。

しかし、三回にわたる追跡データを用いて、各時点での進路希望を組み合わせたパターンをつくると、これと学業成績の変化との対応関係は読み取れない。つまり、表2-4のように、各時点での成績と進路希望との相関はあると仮定しても、それが高校在学中に強まるとか、成績に応じて枝分かれするといった傾向はない。

この点を、さらに進学を大学、短大、専修学校に区別して、進路希望のウォーミングアップ（就職→専修学校→短大→大学の方向を仮定）とクーリングアウト（逆方向）に成績が関連するかどうかを見ても（表は省略）、同様に有意な関連は見られなかった。つまり、学力面で選抜の厳しくない専修学校と就職との選択の変化だけではなく、大学希望と他の希望との変化においても成績変化との関連が見られない。

これまで、成績と進路希望との対応といったイメージが実態以上に強調されすぎたきらいがある。

表2-4 成績の変化と進路希望の変化

イ) 1年時の就職希望者

	就 職	進 学	未 定	そ の 他	合 計	(対 象 数)
合 計	84.0	13.4	1.2	1.4	100.0	(865)
上 昇	82.6	14.4	0.8	2.1	100.0	(236)
変 動 な し	83.0	12.8	2.1	2.1	100.0	(141)
下 降	85.7	12.3	1.3	0.7	100.0	(301)
そ の 他	84.0	14.4	0.5	1.1	100.0	(187)

ロ) 1年時の進学希望者

	就 職	進 学	未 定	そ の 他	合 計	(対 象 数)
合 計	21.0	76.8	0.7	1.4	100.0	(966)
上 昇	22.7	75.2	0.0	2.1	100.0	(238)
変 動 な し	12.2	86.6	0.0	1.2	100.0	(164)
下 降	21.9	76.5	0.8	0.8	100.0	(370)
そ の 他	24.7	71.1	2.1	2.1	100.0	(194)

むしろ、高校在学中、成績面とは関係なく進路希望が変化することも、かなり多いのである。

もちろん、調査票の質問の仕方です「上昇」「下降」という場合の程度は本人の意識次第である。また裏返せば、進路希望の変更を余儀なくされるほどの大幅な成績変化がないということでもあろう。

ともあれ、これまでの研究では進路意識の分化・分極化の過程が注目されてきた。しかしながら、本節の分析の結果からは、進学・就職といった基本的な進路選択においても、成績に対応した分極化が進まず、流動的な進路意識があることが明らかになった。

第 5 節 進路の実現困難への対応

1) 就職希望者の対応

これまでの節から、高校在学中の進路希望はある程度の流動性・不確定性をふくみながら、3年生も夏休み近くになっていることがわかった。この時点から卒業までの時期は、多く限定された進学・就職機会をめぐる選択と選抜であり、それまでの希望がそのまま実現するわけではない。そこで、進学・就職希望が達成ができそうにない場合の次善の策を考えることもあるだろう。この点を3年生の生徒たちに質問した。

まず希望の就職が難しそうなばあい、表2-5（単一選択）のように、希望を変更して就職するという者がほぼ半数であり、一部には専修学校などへの進学への変更も考えている。他方、あくまで当初の希望どおりの就職先をさがすという者も4分の1あり、さらに「考えたことがない」者も11.1%いる。就職機会が制約されていた対象サンプルの卒業当時、こうした回答者の中から就職できず無業という進路をとる者がでていた可能性も大きいだろう。

表 2 - 5 希望の就職ができない時の進路

(%)

		合 計	希望を変更して就職	希望に合う就職を探す	大学・短大へ変更	専門学校へ変更	アルバイト・家事手伝い	考えたことがない	その他	無 回 答
男子	普通科	100.0	33.8	26.8	5.6	7.0	2.8	12.7	1.4	9.9
	職業科	100.0	47.1	26.5	2.4	7.6	0.8	12.6	1.4	1.6
	小 計	100.0	45.5	26.6	2.8	7.5	1.0	12.6	1.4	2.6
女子	普通科	100.0	48.5	25.7	2.9	6.6	6.6	8.8	0.0	0.7
	職業科	100.0	56.0	22.7	1.6	4.4	2.3	9.8	0.5	2.6
	小 計	100.0	54.2	23.4	2.0	5.0	3.4	9.6	0.4	2.1
男 女 計		100.0	49.8	25.0	2.4	6.3	2.2	11.1	0.9	2.4

2) 進学希望者の対応

進学希望者については、本来の希望が実現できそうにないときの対応を、多項目選択で質問した。その結果を性別・学科別にみると表2-6のとおりであり、ほかに大学短大を受験するというケースが63.2%ともっとも多く、ほかに専門学校を受験する者も40.6%ある。他方、ほかに就職試験も受けるという者15.4%、進学希望をやめて就職希望に変更する者15.0%や、考えたことがないという者17.8%などがあり、まだ実際の進路までの希望の揺れ動きがあると見ることができよう。

表 2 - 6 進学希望の実現困難への対応

(MA, %)

		合 計	他の大学・ 短大を受験	専門学校 を受験	就職試験 を受ける	希望以外は 受験しない	就職希望 に変更	考えたこ とがない
男子	普通科	100.0	72.4	38.6	12.5	16.9	11.3	14.5
	職業科	100.0	46.2	48.1	21.8	10.9	20.5	20.5
	小 計	100.0	64.1	41.6	15.4	15.0	14.2	16.4
女子	普通科	100.0	72.5	39.6	13.6	4.9	13.1	16.5
	職業科	100.0	20.2	39.4	22.3	11.7	26.6	30.9
	小 計	100.0	62.3	39.5	15.3	6.2	15.7	19.3
男 女 計		100.0	63.2	40.6	15.4	10.7	15.0	17.8

第 6 節 考 察

学歴社会は、学歴・学校歴の違いによって社会的なキャリア達成のための走路が異なり、それが次第に大きく隔てられていくことであると考えられている。そうすると、これが今日事実かどうかはさておき、教育的な場において、進路を選択する生徒・保護者や指導する教師にとって無視できない社会イメージが事実存在している。このため、社会的な達成をもとめる競争が教育的な達成を求める競争と渾然一体となって展開していく。

教育における進路分化の研究においても、社会的な場での「トラッキング」をモデルとして、現実を把握しようとする人が多いように思う。こうした枝分かれと再挑戦の不在の図式は、教育的な競争をめぐる焦点をより早期の段階へと移す。研究が、巷間の進学熱の早期化を追いかけ・支え・促す役割を果たしているのかもしれない。

われわれが検討したのはこれらの教育の場での意識形成のプロセスである。本章の知見をひとことでいえば、そうしたクリアーな<図式>が描けないことが明らかになった、ということにすぎないのかもしれない。ただし重要な点は、多くの研究が用いてきた回顧的な質問から得られた情報は現在の意識に合わせて正当化されたもの、あるいは適切な「ストーリー」ができたものではなかったのだろうか。そしてこうした情報をもとにクリアーな説明をすればするほど、一面では社会的な「神話」を構成し、高校段階でのトラッキング問題から中学校、小学校などより下の段階の教育的選択に過敏な状況を生み出す材料となりかねない。

本章の調査結果の検討から、高校時代の進路意識が多少のランダムさをもって変化していること、つまりその不確定性・流動性が指摘できた。学校内のプロセスを見るときに枝分かれのクリアーな<図式>が強調され過ぎるのはいかなるものか、調査結果からこの点を問題として提起しておきたい。

(注)

- 1) 藤田英典「進路選択のメカニズム」山村健・天野郁夫編『青年期の進路選択』有斐閣、1980年。
- 2) この概念は、英国の教育社会学者 Lacey, C. が、学校内での能力別学級編成と「生徒文化」の問題ではじめ用いたものである。わが国では、耳塚寛明ほか「高等学校における学習指導組織と生徒の進路意識」(東京大学教育学部紀要第21集、1982年)を参照。